

学会主催の思い出

第23回 会長 砂 田 輝 武

昭和44年末、未曾有の大学紛争のあおりで学会の在り方、学術集会の在り方に対してもきびしい問いかけがなされつつある。むずかしい時期に、私は第23回日本胸部外科学会会長をひきうけることになった。もともと同学の士の集りといった無理のない形で、できるだけしてできた本学会ではあったが、歴史を重ね会員も新旧とその数が多くなってきた当時、旧態然たる学会の姿や運営のマンネリ化が若い会員の心にはたえられないものとしてうつったようである。学会は会員の皆が自分の学会として魅力と愛着をもちまた誇りうるものでありたい。私は、会員のきびしい声をふまえて、学会を一步でも二歩でもよりよい姿に近づけるよう前向きにとりくむことが会長に課せられた責務であると痛感したのであった。

その手はじめとして、西村正也前会長のときより懸案の「学会の在り方委員会」を早速発足させて改革点について検討を開始した。そのとき集った委員達がまずはなされた声は学会はもっと仕事をせよということであった。たしかに従来、学会規則第4条にうたわれている事業の実施は活発とはいえなかった。本学会がその後、各種の委員会活動が活発となり、会員の教育に熱を入れ、評議員、理事の職務、責任やその選任方法もはっきりし、現在学会の姿が大きく変わってきたが、これは在り方委員会の度重なる熱心な検討が実ったものであり、本学会に初めてこの委員会を設置した私には人一倍感慨深いものがある。

しかし当時学会がこの様な状態にあっても、四半世紀にわたる日本胸部外科学会の伝統を継承し、斯学に関する研究の発表、知識の交流、発展に適切な場を提供する使命が学会にある。これが総会（学術集会）の開催であり、学会における最大の事業である。当時この総会の在り方に対しても批判があり、私は私の主催する第23回総会では小さい一歩であっても改善に着手しようと努めた。そんなわけで従来と違った試みや初めての試みをいくつか行った。もともと私は総会をどのようにやるかは、学会の伝統を大きく踏みはずさない限り会長の自由であるという考えをもっていた。

まず学会の期日を、例年の10月後半より1カ月半以上早めて9月5、6日とした。私は学問の進歩、普及のため学会は極めて重要であるが、会員に教職にあるものが多いことを思うとき、総会出席のため教育が犠牲になってはいけなと考えて会期を暑中休暇で暑さも峠をこした9月始めを選んだわけである。

総会演題はすべて公募とし、演題の採択については会長個人の独断を防ぐため、会員の中から24名のプログラム委員を委嘱し、採択の公正を期したが、本学会にプログラム委員をおいたのは初めてのことである。

本総会では演説会場をできるだけ一会場とし、会員があちこち移動することなく落ついてゆっくり聞き、討論も十分にできるよう演説数を思いきって制限し半数以下にした。会場が多くては会員に関心あるいくつかの問題の1つにしか参加させないことになり、好ましくないと思ったからである。なお演説のほか展示発表を採用したことも本総会の新しい試みである。展示発表にも討議の時間を設けその記録をとどめるなど演説発表と同様にあつかうことにした。ともかく日本の学術集

会は従来、採用演題数が多すぎ、したがって会場数も多すぎるきらいがあり、これを何とかしたいという考えが私にあった。

この考えから、本総会では次の14主題をきめ、これについて演題を募集したことは1つの特徴といえよう。

(1) 大血管転位症、(2) 心内膜床欠損症、(3) 心臓弁置換の適応拡大、(4) 開心術後合併症、(5) 体外循環、(6) 心診断、(7) ペースメーカー、(8) 胸部解離性大動脈瘤、(9) 食道の機能性疾患、(10) 食道再建術、(11) 胸腺腫瘍、(12) 非結核性、非腫瘍性肺疾患の外科療法、(13) 高齢者(70歳以上)肺疾患の外科、(14) 気管、気管支の外科。

これらの主題は、本学会において従来、とりあげられなかったか、あまり大きくとりあげられなかった問題を主としている、いわばあまり日の目をみなかったテーマである。そのかわりポピュラーな問題、従来しばしばとりあげられているテーマはあえて除外した。このほかに自由出題も認め採択した。当然のことながら、学会は会員にとって発表の場であり、これを制限するものではない。ただこの場合も創意に富み未発表のものであり、プログラム委員の選考にパスしたものであることはいうまでもない。

本総会の演題募集方法は前記のような私なりの考えで、本学会としては今までにない新方式をとったのであったが、主題からもれた胸部外科の分野を専攻する会員から、会長は独断すぎるとの小言があったようである。私としてはそのため自由出題も認めていたはずであった。

またこの総会ではシンポジウム、特別講演、教育講演はとり行わなかった。従来とりあげられているテーマは日常重要な問題であるが、毎回テーマがほとんど同じであり、また参加演者にも同一の顔ぶれが多く、そういう点も考慮して中止することにした。学会の使命の1つに教育という面があり、これから考えるとその配慮にかけるとの非難をうけると思うが、一面マンネリズムの傾向があり、ここで学会のよびものの在り方をも再考する必要があると考えたからである。

そのかわり、公募主題については、1、2の主演説者をおき、全体としてシンポジウム形式で発表してもらい、十分な討議、発言を加え、さらに最後に座長演説として座長から主題に関して展望を述べていただき、学問の向上の面からも教育の観点からもみのり多いものにしたと考えた。

なおこのほかに会長演説「体外循環の過去、現在、未来」と2つの外人招待演説、その1つは米国の阿久津哲造教授による「補助循環法」、他はソ連のロマシヨフ教授の「胸部外科における縫合器」についての演説をとりあげたが、いずれもそれぞれの関連演題群の中で演説のほか討論にも参加するようにし、日程内容を一応すっきりしたものにした。

学会変革の過渡期の総会らしく、異例の「学会の在り方」に関する検討会が前年の第22回総会につづいて本総会でも第1日の夜開かれ活発な討議がかわされた。

ともかくこのむずかしい時期に総会を主催することになり、私なりに種々苦心と努力をはらったつもりであったが、前述したように演題募集では小言をきき、総会議事では総会議事の運営法、さらに当時問題になっていた心臓移植に対する学会としての態度についてきびしい詰問をうけるなど、私にとってはこの第23回総会は心配し苦慮した思い出の方がつよい。しかし当時私が微力ながら学会と総会を少しでも改革しようとした努力に対しねぎらってくださった会員の温い言葉は今も忘れることはできない。各演説の内容については紙面の都合もあり割愛させていただくことにする。

(香川大学副学長、前岡山大学教授)